

Uwe Fischer, Friedemann Baum, Susanne Luftner-Nagel (著)
角田博子, 東野英利子 (監訳)

わかる！画像診断の要点シリーズ 8

わかる！乳腺画像診断の要点

園尾博司

(川崎医科大学乳腺甲状腺外科教授)

このたび、角田博子、東野英利子両先生の監訳による「わかる！乳腺画像診断の要点」が発行された。本書の原本はドイツ語で書かれていたものであり、その英語版を日本語に翻訳したものである。

本書の特徴のひとつは、日常臨床で遭遇する乳腺疾患や手術を含めた外傷後の変化をはじめ、まれな良性・悪性疾患に至るまで網羅的に、3つの画像（超音波、マンモグラフィ、MRI）が提示されている点である。わが国ではMRIが、超音波、マンモグラフィとともにすべての疾患に提示されている教科書はなく、MRIが広く普及しているドイツの教科書らしい特徴であり、貴重である。もうひとつの特徴は、各疾患とも、概要、画像所見、臨床事項（症状、治療、

経過と予後）、鑑別診断、診断のポイントとピットフォールに分けて要点が短く記述されているので読みやすく、随所に頻度が明確に記述されているので理解しやすい。

また、わが国にはMRIの統一された診断基準が作成されていないので、本書のMRIの診断基準は大変参考になる。一方、わが国のマンモグラフィのガイドラインは、アメリカのBI-RADSに基づいているので、乳房構成などの記述法に若干の違いがある。すなわち、わが国では脂肪性、乳腺散在、不均一高濃度、高濃度の4つに分類するが、本書ではこれに乳癌検出感度を加えた、タイプI（脂肪性・乳癌検出感度98%）、タイプII（乳腺散在・同90%）、タイプIII（不均一高濃度・同70%）、タイプ

IV（高濃度・同40～50%）の4つに分類されている。また、超音波検査の診断基準においても、内部エコー濃度の基準、良悪性を鑑別する縦横比の指標に違いがある。すなわち内部エコー濃度の基準は、本書では乳腺実質、わが国では脂肪組織に置いている点、良悪性を鑑別する縦横比の指標は本書では1、わが国では0.7としている点が異なっている。これらの診断基準の違いは本文に明記されており、また、診断基準にある程度の幅があることを理解しておくことは、よりの確な画像診断のために重要なことと考えられる。

以上に述べたように本書は、日常遭遇するすべての乳房疾患に幅広く対応できる簡便な教科書として、乳房画像診断に携わるすべての医師・技師における明日からの診療に役立つものと確信し、推薦致します。

●B5変型/頁316/2009年/定価5,880円（本体5,600円＋税5%）
[ISBN978-4-89592-612-6]
メディカル・サイエンス・インターナショナル刊